平成２４年４月２０日発行

北海道国際理解教育研究協議会

会　　長　中村　　淳
事務局長　古里　和雄

会報　第81号

# 明日へのとびら

北海道国際理解教育研究協議会
副会長　　笹　木　卓　三
（帯広市立大空中学校長）

日本の若者たちが、アフリカのガーナのカカオ農場で働く親子を訪ねるテレビ番組があった。その番組の一部を切り取って構成した道徳の授業（国際理解）を参観することができた。すぐに、そのＤＶＤをダビングしてもらって、自分でも授業をしてみた。カカオ農場で働く親子がチョコレートを食べたことがないという実態を知った若者たちが、日本から持ってきたチョコレートをその親子にあげるべきかどうかを悩むシーンがある。それを子どもたちに考えさせることを通して、国際理解の目標に迫ろうとするものだった。

映像の力はすごい。カカオ農場で働く子どもが、くつ下を丸めてサッカーボールの代わりして遊ぶシーンを見て、涙が出そうになった。貧しいということは、こういうことである。生徒たちも、これが現在の地球上の１シーンであることにショックを受けたようだった。最後に、クラスみんなでチョコレートを食べた。ふだん、文章などあまり書きたがらない生徒たちが堰を切ったように、感想を書き出した。何気なく食べているチョコレートから世界の現実を自分のことのように感じ取った瞬間だった。授業者である私も感動を覚えた。

これだから、授業はいいなあと思う。授業は、私たち学校に勤める者に与えられた宝物である。今年、１０月２６日（金）、第３３回北海道国際理解教育研究大会十勝・帯広大会が行われる。私たち十勝地区のメンバーは、上川・旭川大会の成果を引き継ぎ、よりよい授業を提供し、参加者のみなさんの宝物にしていただくことを願っている。充実した研究大会になるように、十勝地区の熱意を受けて止めていただき、一人でも多くの方の参加をお願いしたい。

はじめに紹介したテレビ番組は、『あいのり』という日本の恋愛バラエティである。若い男女が、世界を旅する中で本物の恋愛を模索していく姿に多くの共感が寄せられた。そのテーマ曲が、「明日への扉」（歌手：川嶋あい）である。私たちは、人生を生きる上でいくつもの「扉」を開ける。国際理解教育は、まさに「明日への扉」であろう。

今後ますます国際的な相互依存関係を深めていく社会の中で生きていく子どもたちが、国際的な視野と国際社会で生きる能力を身に付けるには、まだ見ぬ「扉」の向こうに歩んでいくしかない。私たちも子どもたちと共に開けましょう。「明日への扉」を。

# 第２回理事会総会・冬季研修会

平成２３年度の第２回理事会総会と研修会が開催されました。

理事会総会では、今年度の各部の報告と次年度に向けた事業計画が審議されました。今年度は会員の皆様のご協力により、無事に活動を推進することができました。次年度につきましても、皆様のご協力をお願いいたします。

【会次第】

１．開会の言葉　　副会長　泰地　和幸（胆振地区会長）
２．会長挨拶　　会　長　中村　淳
３．自己紹介（理事･事務局員）
４．説明報告事項
（１）帰国教員報告会・派遣教員研修会・激励会について　　古里担当事務局長
（２）平成２３年度事業報告　　各担当者
研究・事務局・庶務・広報・会計・組織
＊研究部は、研究の説明・報告の後、別室で研究協議を行う。
（３）平成２３年度会計中間監査報告
（４）第３２回北海道国際理解教育研究大会上川・旭川大会を終えて
藤崎良二上川・旭川地区会長
（５）今後の大会開催予定地

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 十勝 | 2 檜山 | 3 札幌 | 4 後志 | 5 札幌 | 6 胆振 | 7 札幌 |
| 8 上川 | 9 渡島 | 10 札幌 | 11 網走 | 12 十勝 | 13 檜山 | 14 釧路 |
| 15 石狩 | 16 旭川 | 17 札幌 | 18 釧路 | 19 後志 | 20 北見 | 21 胆振･室蘭 |
| 22 札幌 | 23 十勝 | 24 上川･旭川 | 25 釧路 | 26 石狩 | 27 胆振 | 28 網走 |
| 29 空知 | 30 札幌 | 31 函館 | 32 上川･旭川 | 33 帯広 | 34 釧路 | 35 札幌 |
| 36 石狩 | 37 胆振 | | | | | |

・平成２４年度　第３３回大会　十勝地区　開催決定（第 10 次研究　２年次）
・平成２５年度　第３４回大会　釧路地区　開催決定（第 10 次研究　３年次）
・平成２６年度　第３５回大会　札幌地区　開催決定（第 11 次研究　初年度）
・平成２７年度　第３６回大会　石狩地区　開催決定（第 11 次研究　２年次）
・平成２８年度　第３７回大会　胆振地区　開催決定（第 11 次研究　３年次）

５．審議事項
（１）平成２４年度事業計画
研究・事務局・庶務・広報・会計・組織
（２）役員選出
休憩　役員選考委員会　(司会；島田事務局次長)
※ブロック１　オホーツク地区会長　　ブロック２　十勝地区会長
ブロック３　小樽地区会長　　ブロック４　日高地区会長
プロック５　檜山地区会長　　プロック６　札幌地区会長

６．新旧役員紹介･挨拶

７．次期大会開催地会長挨拶　　笹木卓三　十勝地区会長
８．連絡・その他
・全海研会費及び事務局運営金納入のお願い　　福田会計部長
・平成２４年事務局運営金各地区納入額　　事務局長
９．閉会の言葉　　石塚信彦　空知地区会長

総会の報告では、研究部から大会運営についての運営は各地区研究部が中心となって人選し、研究を深めていくことや、広報部からは次年度はメールによる配信に切り替えること、組織部としてホームページの充実を図っていくことが報告されました。

# 派遣教員及び帰国教員研修会

理事会終了後、在外施設の貴重な経験を交流し合い、本道の子どもたちへ少しでも還元していくことを目的に派遣教員及び帰国教員研修会が行われました。

【開会式】

1．会長挨拶　　会　長　　中村　淳

2．来賓挨拶　　北海道教育庁学校教育局義務教育課
義務教育指導グループ主査　神森　一志　様

【全体研修会】

講　話

「新時代の国際協力（在外経験も踏まえての雑感）」

独立行政法人　国際協力機構（JICA）
札幌国際センター所長　　外川　徹　　様

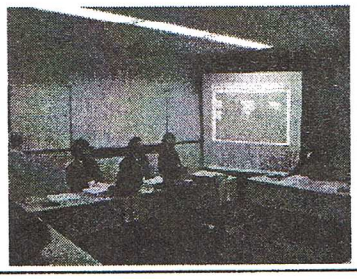
【帰国報告会】

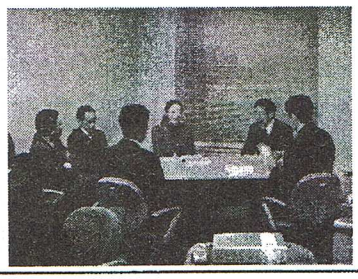
発表者（派遣先(国名)・現職先・職名・お名前(敬称略)）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 北京日本人学校(中国) | 当麻町立当麻小学校 | 教諭 | 澤渡　千修 |
| スラバヤ日本人学校(インドネシア) | 富良野市立扇山小学校 | 教諭 | 田畑　幹夫 |
| ロンドン日本人学校(イギリス) | 乙部町立乙部小学校 | 教諭 | 能代　淳司 |
| ソウル日本人学校(韓国) | 札幌市立札苗中学校 | 教諭 | 井上　博文 |
| 蘇州日本人学校(中国) | 稚内市立稚内南中学校 | 教諭 | 千葉　恵一 |
| ニューデリー日本人学校(インド) | 岩内町立岩内第一中学校 | 教諭 | 梶原　大 |
| シカゴ日本人学校(アメリカ) | 旭川市立知新小学校 | 教諭 | 山名　正記 |
| メキシコ学院に本コース(メキシコ) | 芦別市立芦別小学校 | 教諭 | 市村　慈規 |
| 大連日本人学校(中国) | 札幌市立百合が原小学校 | 校長 | 継田　昌博 |
| バンコク日本人学校(タイ) | 根室市立柏陵中学校 | 教諭 | 上野　資幸 |
| 台中日本人学校(台湾) | 登別市立幌別中学校 | 教諭 | 中島　英治 |
| 大連日本人学校(中国) | 函館市立的場中学校 | 教諭 | 中尾　文 |
| ペナン日本人学校(マレーシア) | 伊達市立伊達小学校 | 教諭 | 浅野　美香 |

【派遣教員研修会】

各地区に分かれて、帰国者を含め先輩教員から現地の事情を聞きながら質疑応答をしました。派遣される先生方にとっては、生きた情報を得る場となり、とても実りある研修になりました。





平成２４年度

# 在外教育施設派遣教員一覧

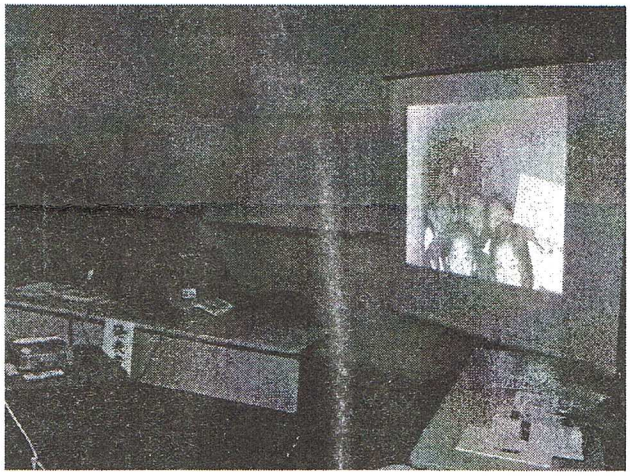
| 管内 | 氏名 | 所属先 | 職名 | 派遣地域 | 派遣先 |
|---|---|---|---|---|---|
| 根室 | 加藤　和弘 | 中標津町立中標津東小学校 | 教頭 | マレーシア | ペナン日本人学校 |
| 胆振 | 猪俣　俊哉 | 苫小牧市立泉野小学校 | 教頭 | フィリピン | マニラ日本人学校 |
| | | | | | |
| 石狩 | 佐々木康人 | 千歳市立青葉中学校 | 教諭 | アメリカ | グアム日本人学校 |
| | 田中　孝治 | 恵庭市立若草小学校 | 教諭 | オランダ | ロッテルダム日本人学校 |
| 渡島 | 山崎　誠 | 森町立さわら小学校 | 教諭 | イギリス | ロンドン日本人学校 |
| | 中村　彩子 | 北海道八雲養護学校 | 教諭 | インドネシア | ジャカルタ日本人学校 |
| 空知 | 鈴木　一朗 | 岩見沢市立緑中学校 | 教諭 | パキスタン | カラチ日本人学校 |
| 上川 | 畠山　剛嗣 | 旭川市立忠和中学校 | 教諭 | バングラデシュ | ダッカ日本人学校 |
| 宗谷 | 西林　慶武 | 稚内市立稚内東中学校 | 教諭 | ドイツ | ベルリン日本人学校 |
| オホーツク | 長崎　祐紀 | 北見市立相内小学校 | 教諭 | アメリカ | サン・フランシスコ補習授業校 |
| 胆振 | 鹿野　智雄 | 室蘭市立水元小学校 | 教諭 | 中国 | 上海日本人学校 |
| 十勝 | 河江　邦教 | 鹿追町立笹川小学校 | 教諭 | ベネズエラ | カラカス日本人学校 |
| | 越智　卓 | 帯広市立稲田小学校 | 教諭 | メキシコ | 日本メキシコ学院日本コース |
| 札幌市 | 中田　卓良 | 札幌市立八軒北小学校 | 教諭 | ブラジル | リオ・デ・ジャネイロ日本人学校 |

任地でのご活躍をご祈念申し上げます。
落ち着きましたら、現地の教育・生活情報等を本会へお知らせいただければ、
本会から会員の方々へ情報を還元し、教育活動へ役立てることができます。
また、派遣を希望される方々にとりましても、貴重な情報となりますので、
お知らせください。本会からは、会報を毎号現地へお届けいたします。

## 帰国報告会概要

【第１部会】
発　表：　「中華人民共和国　北京日本人学校に勤務して」
当麻町立当麻小学校　　教諭　澤渡　千修
「インドネシア共和国　スラバヤ日本人学校」
富良野市立扇山小学校　　教諭　田畑　幹夫
助言者：　札幌市立厚別西小学校　　教　頭　　白　川　　典　洋

【発表の概要１】



在中華人民共和国日本国大使館附属北京日本人学校は、昭和５１年４月２６日に設立され、はじめは１７名の児童・生徒から始まりました。設立当初は、日本人大使館公邸にありましたが、児童の増加に伴い現在の場所へ移転しました。地蔵・生徒数も増加し、教室の増設を行ってきましたが、２００８年の６８８名をピークに少しずつ減少してきています。

２００４年の北朝鮮の脱北者の日本人学校への侵入事件をきっかけに安全管理体制も見直され、今は年に２回の不審者侵入への避難訓練を行っています。

学校の特色としては、小中併置という利点を生かし、各行事を「たてわり班」で行うことで、子どもが主体となった活動を行っています。

また、北京オリンピックや北京パラリンピックの開催の際には、たくさんの選手が来校してくださり、子どもたちへお話をしてくださいました。子どもたちにとっては、努力した一流選手の話を直接聞く機会となり、子どもたちも大きな夢をもつことができました。

この他にも最近は経済発展に伴い、日本企業が多く進出してきましたので、同じ日本人として工場を見学させていただくなど、在外でも日本人とのつながりや絆を数多く感じることができました。また、国際交流として、学校では、週１回の中国語の授業に取り組み、現地校との交流活動にも力を入れています。ただ、このような貴重な経験をもたせてあげたいと思う反面、日本と同じ教育を実施するためには、時数的な問題も大きな課題となっています。

【発表の概要２】

インドネシアは、赤道直下に位置するたくさんの島々で構成される国であり、日本との結びつきも非常に大きな国です。また、インドネシアは、多様性の国といわれるほど多民族・多言語国家であり、それぞれ独自の文化や生活習慣をもっていることに驚かされます。宗教については、国民の約９０％がイスラム教徒であり、早朝から始まるアザーンや寝静まった夜に流れるお祈りを呼びかける放送には、驚かされた。

スラバヤ日本人学校については、歴史も古く、その前身はスラバヤ日本國民學校として１９２５年に誕生した。その後、第２次世界大戦等を経て、１９７９年にはスラバヤ日本人学校として開校した。本校の特徴としては、日系企業に勤める保護者の関係で３～５年で転校する児童が多く、中には母親がインドネシア人で幼稚園から中学校卒業までの１０年間を本校で過ごす子もいる。また、国際結婚家庭は、約５割を占め、日本語での思考力、語彙力、理解力の問題から学習や生活の適応に課題を抱える子も少なくない。このような子どもたちへの支援も大きな役割となっている。

学校生活は、チャイムを鳴らさず、子どもたちが各自で時間を意識できるように取り組んでいる。また、基礎学力の定着をめざして、小学部では１０分間、中学部では２０分間の学習時間を設け、１００ます計算等を行ってきたが、語彙力を広げるという意味から「１００６の漢字も一字から」という取り組みを始めた。この他にも、国際理解教育や体力づくり等現地ならではの活動を教職員が知恵を出し合いながら取り組んでいる。

【第２部会】
発　表：　「受け入れ、そして、受け入れられる」
乙部町立乙部小学校　　教諭　能代　淳司
「ソウル日本人学校」
札幌市立札苗中学校　　教諭　井上　博文
「中国　蘇州日本人学校」
稚内市立稚内南中学校　　教諭　千葉　恵一

【発表の概要１】

在外施設派遣に当たっては、いろいろなストレスを感じるものであるが、特に大きいものは言語環境に対する問題である。私自身も派遣後、この問題に直面し、数ヶ月間は英国人と会話することが億劫で極力避けるようにしていた。そのような中で、大きな機転となったことは、ある方からの「英語が母国語の英国人が、なぜ自分の片言の英語を理解してくれないんだ！という位のスタンスで話せ」というアドバイスであった。これまでの自分は、相手に受け入れられようと頑張っていたが、まず、英語ができない自分を受け入れていくことで、気持ちも楽になり、コミュニケーションにも力が抜けて、楽しく会話ができるようになりました。このように受け入れるということを楽しめるようになると、レストランでの食事も楽しくなり、たくさんの方々とのふれ合いにも楽しみを見つけることができるようになりました。自分自身の気持ちのもち方をどのようにするかで、見え方も感じ方も代わってくることを実感しました。

【発表の概要２】

ソウル日本人学校へ赴任した私にとって大きな課題は、「どのように戦争について伝えたらいいのだろう」ということであった。この解決の糸口を見つけ、すばらしい方と出合うことができたことが私にとって大きな財産となりました。

それは、一枚の絵との出会いがきっかけでした。その絵は、李方子さんが描かれたもので、職員室に飾られた「晩秋」と銘打たれた柿の木の絵でした。その絵を辿っていく中で、キム・スイム先生との出会いがあり、キムさんから語られる思いに深い感銘を受けました。

その他に、ソウル日本人学校については、２０１０年に現在の麻浦区 DMC 地区へ学校を移転し、新しい校舎で教育活動に取り組んでいることや北朝鮮との緊張状態の中で安全管理が非常に重要な要素になっています。また、多くの日系企業が進出してきているため、児童・生徒の出入りも多く、保護者のニューズも受験対応から基礎・基本の学力の向上、豊かな人間関係まで多岐に渡っていますが、どの教員も熱心に取り組んでいます。

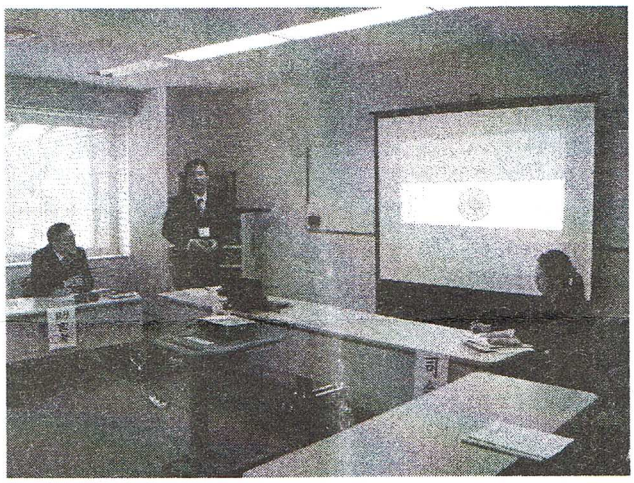
【発表の概要３】

蘇州日本人学校は、２００５年に開校した歴史の浅い学校である。児童・生徒数も２７０～２８０名程度で、安定した状況が続いている。学校では、中国政府からの認可の関係で、中国語を指導することが義務づけられているため、週２時間程度の中国語と１時間の英会話を実施している。また、中国の街中では、中国語を話せないと買い物もできないことから教職員も日常会話程度の中国語を習っている方が多い。教科指導については、学習指導要領に基づいて取り組んでいるが、在外施設ならではの現地理解教育にも力を入れている。現地校との交流は、年に１回で、隔年でそれぞれの学校を訪問する形をとっている。また、中学部では、毎年、蘇州外国語学校とスポーツを通した交流も行い、親睦を深めながらお互いの文化や風習を体験できるよい機会となっている。

この他にも、運動会では、小中併置のよさを生かし、縦割り班を組織して、競技を行ったりしている。このような取り組みの中で、先輩から後輩へ学校の文化や伝統を引き継ぎ、蘇州日本人学校の歴史を作りあげている。

【第３部会】
発　表：　「インドとニューデリー日本人学校　人生観を変えた濃厚な３年間」
岩内町立岩内第一中学校　　教諭　梶原　大
「アメリカ合衆国　シカゴ日本人学校に勤務して」
旭川市立知新小学校　　教諭　山名　正記

【発表の概要１】



ニューデリー日本人学校は、インドの北西部に位置し、内陸気候のため、夏は非常に暑く、冬は雪こそ降らないものの１０度以下まで気温が下がり、気温の差が３０度以上になる地域です。

インドは、ここ数年の経済発展で日系企業もたくさん進出し、児童・生徒数も１００名を超える規模になっており、保護者のニーズも年々多様になってきています。特に、東京や関西から転校してくる子が多く、受験対応をしっかりとしていく必要があります。また、中学受験を考えている家庭もあることから、情報収集等をしっかりと行い、保護者へ対応してきました。

学校では、年度によって派遣される人数が大きく違っていることから派閥ができないように配慮しながら教職員が協力して取り組んでいました。

教育活動の中で特徴的なものは、特に水泳学習に力を入れていたことです。ニューデリー日本人学校では、４月から９月までの約半年間水泳学習を行うことができ、放課後外で遊ぶことのできない子どもたちにとっては貴重な運動の場となっています。そのため、週３回の体育授業のうち、２回を水泳学習に当て、能力別の指導を行いながら充実を図ってきました。また、校内での水泳大会を実施したり、現地校との交流でも水泳競技大会を開催したりしながら子どもたちの力を発揮させています。

また、課外の活動にも力を入れ、毎週土曜日には、柔道教室なども実施しながら保護者のニーズに応えるようにしていますが、低学年の参加の要求もあり、指導者の人数の関係から課題となっています。

教職員は非常に仲もよく、協力しながら取り組む姿勢もあり、とても有意義な３年間を過ごすことができました。

【発表の概要２】

アメリカにある日本人学校の多くは、補習校ということで、現地に行くまでは自分に務まるのか不安がありましたが、自分のなすべきことをなすという気持ちをもつことで、徐々に不安も解消されていきました。

補習校は、現地校へ通うこともたちのために放課後や土曜日などを活用して、日本語による学力向上をめざしていますが、リーマンショック以降の不景気で駐在員の数も激減し、生徒数も減っているのが現状です。ただ、その分、少人数クラスでのきめ細かな指導が可能となりました。

学校の特色としては、小学校１年生から中学校３年生まで週４時間の習熟度別の英語教育を行っています。この英語教育は、アメリカ人の教師を中心にして基本的な会話から現地理解教育的な内容まで盛り込んだ幅の広い教育を実践しています。

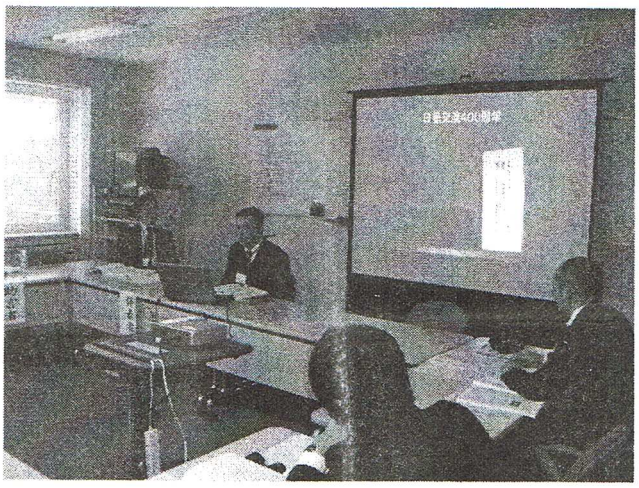
また、現地との交流活動にも力を入れ、小学校１～５年は年に４回、小学校６年・中学部は年２回の交流授業を行いながらコミュニケーション力の向上に努めています。この他にも、現地の施設等を生かしながら教会訪問やスキー・スケート教室の実施など特色ある学校づくりを行っています。

日本人学校へ通う子どもたちも、幼小中まで様々な層の子どもたちがいることから上位学年が低位学年のよきお手本となるように自らを律しつつ、面倒を見る姿がたくさん見ることができます。また、日本の学校と違い、部活動がないことから運動する機会を増やすために、朝のマラソンを行い、５人一チームでの駅伝大会なども実施しています。

このように現地の特色を生かし、現地ならではの教育を実施していく発想と工夫をもつことで、子どもたちにとっても派遣される教員にとても有意義な時間を作り出すことができます。

【第４部会】
発　表：　「VIVA　MEXICO～日本メキシコ学院に勤務して」
芦別市立芦別小学校　　教諭　市村　慈規
「中国・大連日本人学校の学校経営」
札幌市立百合が原小学校　　校長　継田　昌博

【発表の概要１】



新学期が始まって１週間後の４月２４日、緊急連絡網で「大統領命令により学校は翌日から臨時休校、職員は朝５時学校集合」という連絡が入った。新型インフルエンザ騒動の始まりである。

フェーズ５まであっという間に上がり、ウィルスの毒性も患者がどこにいるのかもはっきりしない状況の中で、児童・生徒の安全、自分や家族の安全、休校措置となった学校の事後処理や再開への準備等の様々な議論が続いた。在外施設では、このような厳しい状況に直面することを改めて思い知らされるスタートとなった。

メキシコ学院は、長期在留邦人の子弟のために日本の学習指導要領に準拠した日本コースと、メキシコのカリキュラムによるメキシココースがある。日本コースには、小学部・中学部が併設され、日本と同じような学習内容を指導しながらスペイン語やメキシコ理解学習を進めている。主な行事には、オアステペック林間学校という小学部３年生以上が参加する２泊３日で行われる宿泊的な行事やメキシココースと合同で行われる大運動会、文化祭などがある。また、「カサ・ダヤ」ボランティアという活動では、子どもを出産したストリートチルドレンやその子を受け入れ、社会復帰させる手助けをしている施設へのボランティア活動が行われている。

学校の特色としては、年に数回メキシココースと合同で交流学習を行ったり、合同クラブや行事を交流したりして、お互いの文化や風習を学び合う機会を設けている。

【発表の概要２】

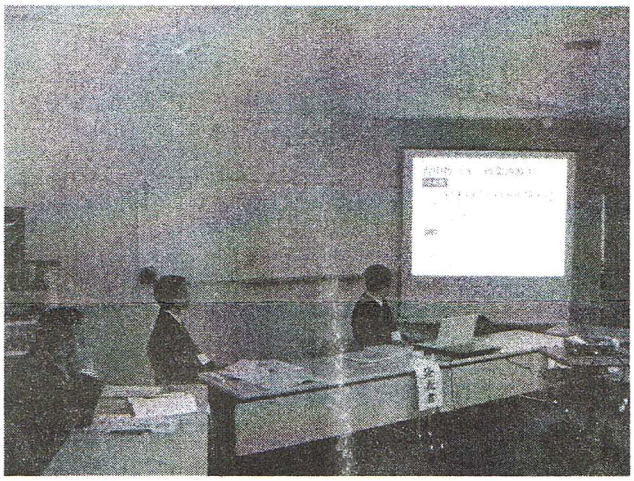
大連日本人学校は、その前身の大連日本人補習授業校と幼稚園が１９９０年からスタートしている。当時は、３５０名の在留邦人が暮らしていたが、日本の子女が安心して通える教育機関がなかったため、多くは単身赴任を余儀なくされていた。中国の発展に伴い、１９８８年以降大連へ進出する日系企業が急速に増大し、学校設立へのニーズが高まってきたため、日本昇降クラブを中心にして賛同と協賛金を募り、１９９４年４月大連日本人学校・附属幼稚園が開校した。開校以降、児童・生徒数も順調に増加し、１８０名を数えるようになったが、２００９年には新型インフルエンザへの不安から減少に転じる局面もあった。

学校経営上の課題としては、児童・生徒に関すること、教職員に関すること、学校保健に関すること、教育課程に関すること、施設設備に関すること等があげられるが、特に、在外施設では、日本の公立学校と違い、現地校やインターナショナルスクールに進学する児童・生徒もいるため、学校を選択される立場となる。そのため、日本人学校の特色づくりが強く求められている。学校経営上の課題は、時間の経過やその時々の保護者や教職員によって常に変化していくものであるため、毎年学校評価を行い、成果と課題を見つめ直しながら改善しなければならない。

在任中の取り組みでは、情報発信の充実と新校舎建設への取り組み等を行ってきた。特に情報発信については、ホームページの充実、学校ガイドブック「スクールポリシー」の発行など保護者に学校の取り組みを理解してもらうことで、より確かな信頼関係をつくろうと考えた。また、新校舎の建設については、３０年以上前に建設された現校舎の耐震性・免震性の問題、民間施設を改造して使用している校舎の安全性の問題等があり、新校舎の建設が急務であった。また、新しいカリキュラムの導入に向け、自前の体育館やプールへのニーズの高まりなど、課題や問題点を整理し、新校舎建設のスケジュールを提出できたことは大きな成果であった。

【第５部会】
発　表：　「在外教育施設派遣報告書」
根室市立柏陵中学校　　教諭　上野　資幸
「台中日本人学校における教育実践」
登別市立幌別中学校　　教諭　中島　英治

【発表の概要１】



バンコク日本人学校は、１９３１年設立の世界で最初に設立された日本人学校である。２００９年には、シラチャ校の開設に伴い、児童・生徒数も減少したが、現在の児童・生徒数は、２５００名弱を数えている。多くの子どもたちは、日本人が住む地域からスクールバスで登下校している。当下校時には、バスが約１２０台必要となるため、下校までには３０分以上かかるときもある。教職員数も、派遣教員、現地採用教員を含め、１３０名近く在籍し、小学部・中学部にそれぞれ職員室がある。

学校では、確かな力を育てる教育活動を柱に、小・中併設の利点を生かした音楽・図工の専科教員による指導が行われている。また、小学部５年生以上の家庭科でも専任教員による指導、算数科のティーム・ティーチング、小学部６年の教科担任制が行われ、学習内容の充実も図られている。また、中学部では、１・２年生の数学科では、少人数指導も導入され、よりきめ細かな指導を図ることで、質の高い学習を行っている。この他にも、小学部５年生以上の毎月１回土曜登校日を設定し、授業時間の確保にも努めている。

日本人学校ならではの取り組みとしては、日本語特別（ことばの時間）を設け、日本語力の保持・向上のために全学年が取り組んでいる。また、日本語補習として、小学部１・２年を対象に、年間２５時間程度の補習も行っている。

【発表の概要２】

台中日本人学校は、１９７６年台中日本語補習学校として全校８名でスタートし、１９８０には、台中日本人学校として認可される。１９９９年には、台湾大地震のため、校舎が損壊し、しばらくは幼稚園の施設を間借りしながら授業を再開し、２００１年に現校舎となる。

学校では、全学年で中国語の授業、４年生以上で英会話も含めた授業を展開している。また、小学部４年生までは、学級担任による教科指導を基本とし、必要に応じて専科による教科指導を行っている。５年生以上では、教科担任制を行い、複数の目で児童・生徒を見ることで、中学生の準備や教員の専門性を発揮し、授業の向上に努めている。

学校の特色としては、基礎学力の向上に向け、週１時間の少人数クラスを設置し、質問学習や自主学習を行いながら学習方法の習得に取り組んでいる。授業日数は、台湾の祝日や夏季・冬季休業を除く、２０５日程度と日本と同じような日数を確保している。ただ、台湾は、台風の通り道になっているため、臨時休校の措置を取ることも考慮し、授業時数をしっかり確保するようにしている。

学校の課題としては、２０１０年１２月の段階で、全校児童・生徒に対する国際結婚家庭の割合が、４８％となっている。学校規則では、入学条件は、日本国籍を有することになっているが、様々な理由や特例措置として日本国籍を持たない児童・生徒も受け入れざるをえない状況がある。このため、日本国籍を持たない子は、現地の公立学校を卒業せずに日本人学校卒業となるため、台湾の高校に進学する場合にも受験資格を得られないという問題も発生している。また、家庭においても日本語を母語としない家庭が多いため、教科の学習以前に日本語力の強化を必要としている。

また、児童・生徒数は、年々増加の一途を辿り、施設・設備の面やスタッフの確保という面でも大きな課題となってきている。

【第６部会】
発　表：　「中国の教育政策と大連市における教育現場の実際」
函館市立的場中学校　　教諭　中尾　文
「マレーシア　ペナンに暮らして」
伊達市立伊達小学校　　教諭　浅野　美香

【発表の概要１】

中国は、日本以上に学歴社会といわれており、大連市も例外ではない。毎学期行われる日本人学校と大連市の中学校との交流会の場においても「一人っ子政策が行われてきた中国の家庭では、両親、祖父母等大人から子どもへ学習面での強いプレッシャーがかかる。教師もその保護者の要求に応え、宿題や補習を多くせざるを得ない。そのことがさらに子どもにプレッシャーを与えている。」と話されていました。このような風潮の中、様々な問題も見られるようになり、近年は「応試教育」からの転換を図ろうという動きも見られるようになってきた。

「応試教育」とは、読んで字のごとく、試験に対応するための教育で、受験競争の低年齢化が加速し、子どもたちは長期にわたって強いストレスにさらされてきている。このような中で、詰め込み教育を排除し、子どもの様々な素質や人間性を育てようと「素質教育」が２００１年に採用され、教育カリキュラムの転換も図られた。

この「素質教育」は、中国で一般的にいわれる「よい学校」（国や省、市の指定で教育整備が整えられ、優秀な教員を揃えた公認の進学校）など「重点学校」制度を廃止し、各教科の内容の精選されたり、日本でいう「総合的学習の時間」に相当する「総合実践活動」を創設したりするなどを柱としている。

このような取り組みの中で、より確かな国際競争力をつけ、発展をめざしている。

【発表の概要２】

ペナン日本人学校は、マレー半島の西側に浮かぶペナン島にあり、島自体は自動車で３時間程度で１周できる小さな地域である。この島には、電気と半導体関係を中心に多くの日系企業が進出している。

学校は、１９７４年に開校し、１９８５年の２０７名をピークに現在は１００名程度で推移している。多くの子どもたちは、日本人が多く住む地域からスクールバスで登校しているが、放課後は、地域のサッカーやソフトボールのクラブに所属したり、コンドミニアムにあるプールで水泳を習ったり、家庭教師による英語のレッスンを受けながら過ごすことが多い。

学校の特色としては、保護者の間でも「海外在住＝英語習得」という意識が強く、英会話能力への期待も大きいことから語学教育として、英会話の授業を現地採用の英会話講師による少人数指導を週２時間実施している。また、国際理解教育として、現地校との交流を年に数回企画しているが、相手校との打合せ等思うように進まないことなど多くの問題を抱えながらも子どもたちの貴重な体験の場として活用させていただいている。この他にも、民族音楽鑑賞会を実施し、マレー系、中国系、インド系と様々な音楽に触れる機会を作っている。

私自身は音楽を専門としてきたが、現地では、小学部１年から中学部３年までの音楽の他、小学部３・４年の図工、小学部の家庭科などいろいろな教科を指導することになり、毎日教科指導との格闘であった。そのような中で、対外的な活動も含む、「音楽鑑賞会」では、打合せや準備等派遣された先生方の協力も得ながら進められ、充実した日々を送ることができたことは、貴重な体験であり、財産となった。

※帰国報告会では、映像や帰国報告集を活用しながら話していただきました。全てを記載することはできませんので、教材等のヒントのほしい方は、ホームページをご覧ください。